

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學蔵『潤一郎新訳源氏物語』草稿の全文テキストデータ化を目指して：附「螢」巻試案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 直子, 大脇, 絵里, 高塚, 雅, 服部, 宏昭, 増田, 祐希 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000819

國學院大學蔵 『潤一郎新訳源氏物語』草稿の

全文テキストデータ化を目指して

—附「蛍」巻試案—

大津直子
大脇絵里
高塚雅
服部宏昭
増田祐希

キーワード

谷崎潤一郎 『源氏物語』 発禁 草稿 現代語訳

はじめに——國學院大學蔵『潤一郎新訳源氏物語』草稿の価値

近代以降の『源氏物語』享受史を振り返れば、谷崎潤一郎の訳した『源氏物語』、いわゆる谷崎源氏の出版意義は大きい。谷崎源氏以

國學院大學蔵『潤一郎新訳源氏物語』草稿の全文テキストデータ化を目指して

前にも、例えば与謝野晶子の源氏訳があった。しかし、昭和十年代、谷崎源氏について皇室への不敬にあたる箇所を訳すことが取り沙汰され、発禁も危惧されたことは対照的に、同時期に刊行された晶子訳についてそうした問題が表面化することはなかった。戦前、一部のインテリ層の教養であった『源氏物語』が、谷崎という作家の手によって広く一般読者の理解できる現代語に訳される。それが中央公論社という後盾に支えられた一大事業であった点において、谷崎源氏の社会的な影響は大きかったと言えよう。

昭和の十年代から四十年代にわたり、谷崎源氏は三度刊行された。一度目は戦前昭和十四年（一九三九）に刊行が開始した『潤一郎訳源氏物語』通称『旧訳』、二度目は戦後昭和二十六年（一九五一）に刊行が開始した『潤一郎新訳 源氏物語』通称『新訳』、三度目は昭和三十一年（一九六四）から谷崎の死後まで刊行が続いた『潤一郎新々訳 源氏物語』通称『新々訳』である。右の他には複数の愛蔵版も刊行されている。谷崎源氏は出版社にとって長期間にわたる大ベストセラーであった。そうした事実とは相反して、研究者の谷崎源氏に寄せる関心は、小説をはじめとした創作作品群に比べて薄い。その証左として、昨年没後五十年を記念して刊行された新たな『谷崎潤一郎全集』（以下、『新全集』平成二十五年九月）現在も刊行中、中央公論社新社）に、三つの谷崎源氏はいずれも収録されていない。三つの訳それぞれがどんな特徴を持っているのか、近年までほとんど問われることすらなかった。

他の二つの訳文と比較して最も原典との大きな異同があるのは『旧訳』である。先述のように、戦前に刊行された『旧訳』に関しては発禁処分となる危惧があった。皇統乱脈を描く『源氏物語』の、皇室への不敬にあたる表現・文脈を中心としたあらゆる箇所の訳出は、丁寧に避けられている。そのことについては、谷崎自身も『旧訳』序文で認めている。^①これは原文の恣意的な〈削除〉と見なされた。^②以来、谷崎源氏については〈削除〉と言う形で『源氏物語』を蹂躪したのは誰かという点ばかりが注目され、戦前国体的論者として活躍した校閲者山田孝雄の主導と考えられてきたのである。^③

平成十八年（二〇〇六）、西野厚志氏は、山田よりむしろ谷崎の方が〈削除〉に積極的であったことを指摘し、谷崎源氏研究の先鞭をつけた。^④奇しくも同年、谷崎の養女である観世恵美子氏より、『潤一郎新訳 源氏物語』草稿（以下『新訳』草稿）が國學院大學に寄贈された。^⑤『新訳』は谷崎が一から起筆したわけではなく、旧訳本に書き足しあるいは書き直しを行うことで生まれた。引き続き校閲を担当した山田に、新進気鋭の『源氏物語』研究者玉上琢彌を中心とした京都大学国文学者グループも加わった。手順としては、まず谷崎と山田、玉上三者に旧訳本が配られる。山田と玉上は、めいめい旧訳本に意見を書き入れ、終了次第谷崎に送る。谷崎は、二つを見比べなが

ら自身の旧訳本に書き入れをする。その谷崎の書き入れに従って旧訳本を修正した第一稿、通称タイプ原稿が作成される。タイプ原稿は旧訳本と同様に三者に配られ、同様の手順で加筆、修正された。よって、『新訳』が誕生するまでには、谷崎を中心としてやりとりされた旧訳本とタイプ原稿とが少なくともそれぞれ三種以上存在したことになる。國學院大學では書き入れをした人物の名前を付けて次のように整理している。

〔國學院大學蔵〕潤一郎新訳 『源氏物語』草稿

山田書き入れ旧訳本…全二十三冊 「桐壺」夢の浮橋

玉上書き入れ旧訳本…全二十三冊 「桐壺」夢の浮橋

谷崎書き入れ旧訳本…全二十三冊 「桐壺」夢の浮橋、付「源氏物語和歌講義上下」

山田書き入れタイプ原稿…「桐壺」夢の浮橋〔浮舟〕一部欠

玉上書き入れタイプ原稿…「桐壺」夢の浮橋

谷崎書き入れタイプ原稿…「桐壺」夢の浮橋〔浮舟〕一部欠

注目すべきは、草稿が、原文の解釈の対立した一、二の事例を除いて直接対面することがなかった三者の往還の記録であり、『旧訳』から『新訳』への改訳の痕跡をそのままとどめている点である。最も簡単な資料紹介の方法は、草稿の画像をアーカイブ化して公開することであろう。しかしながら、仮に草稿の膨大な画像をインターネット上にアップし、閲覧を可能にしたとしても、研究の進展は期待できない。なぜなら、『旧訳』、『新訳』二つの訳文と『源氏物語』の原文、六種類の書き入れそれぞれを対照するのは、原文を見慣れた『源氏物語』研究者であっても骨の折れる作業であるからだ。草稿は先に挙げた通り六種類あり、それぞれの書き入れは実に詳細である。国文学者たちの書き入れは古典文法や有職故実に関する事柄も多い。

そこでこの度、『源氏物語』研究と谷崎研究と、どちらにも寄与する形での資料提示を具現化すべく、校本の試作品である「蛸」巻試案を作成した。「蛸」巻は、訳出の手順が定まったと思しい二十五巻目にあたり、全巻中で最も短い巻の一つである。また、巻の展開上、『旧訳』で原文を恣意的に歪めざるを得なかった皇室への不敬というタブーとも、直接関わらない。試案では、冒頭に谷崎が訳出に使用したと推定される『湖月抄』を添え、活字に起こした上記六種類の草稿と、『旧訳』、『新訳』、その間に位置づけられるタイプ原稿三種の

訳文を成立順に対照している。表記方法などについては後掲の凡例に譲るが、谷崎の視界に入ったテキストを横並びにし、誰の書き入れがどう『新訳』の本文へと反映されたかが一目でわかるよう努めた。

それでは、草稿をテキストデータ化することによって、いったいどんな問題系が浮かび上がるだろうか。

先述のように、従来の議論の中心は、『旧訳』の段階で原文の（削除）がいかように行われたかという点にあった。平成十九年（二〇〇七）、『旧訳』で訳出されなかった箇所を補った痕跡を『新訳』草稿から抽出した結果、約四百六十箇所の加筆の書き入れがあり、改訳の段階で不敬ととらえられる箇所以外にも多くの文脈が補われていたことがわかった⁶。そうした痕跡のうち、皇室への不敬というタブーに触れる可能性があるのは全体のわずか四十%に過ぎない。右の事実から、時局に蹂躪された不完全な訳が『旧訳』で、『旧訳』の完全版が『新訳』、『新々訳』であるとする単純な構図は成り立たないことになる。草稿においては、特に玉上が原文重視の姿勢を貫き、原文と乖離した訳文については熱心に指摘している。つまり、玉上の書き入れから遡及して『旧訳』の訳文の特質を炙り出すことが出来るのである。

また、谷崎の源氏訳と創作との関わりをうかがわせる書き入れも注目される。源氏訳は、谷崎が作家人生の中で経済的に最も逼迫した時期に起筆されたことから、従来、糊口を凌ぐための仕事に過ぎないという評価を受けてきた。誤解を恐れずに言えば、単なる創作の副産物であると捉えられてきたのである。しかし、草稿の詳細な書き入れからは、国文学者らの修正や指摘を丁寧⁷に撰取し、あるいは退けることで主体的に訳業と向き合う谷崎の姿勢が浮かび上がってくる。著名な作家が翻訳作品に名義貸しすることもあった事実をふまえると、このことは注目に値しよう。平成二十五年（二〇一三）、「帚木」巻、「若菜上・下」巻に関する草稿の書き入れを通して、源氏訳と創作活動とが、相互に影響しあっている可能性を検証した⁷。具体的には、『旧訳』を作る三年半の間、創作の執筆を渋った谷崎が唯一発表した小説『猫と庄造と二人のをんな』のプロットに、二巻目の「帚木」との類似点が複数あること、一方で同小説の執筆が、『源氏物語』目「若菜上」以降展開する第二部世界の翻訳へと影響した可能性が高いことを指摘した。こうした視座は、なぜ作家谷崎が『源氏物語』という長大な物語を繰り返し訳したのか、源氏訳が創作活動とどのように関わっているのかという問題を検証する手立てともなる。

今後、本試案を作成してゆく過程で考える必要があるのは、複数の人間が訳出に関わっているという事実である。谷崎書人の草稿二種類には、口述筆記という形で谷崎以外の様々な人々の筆跡が残っている。谷崎源氏は、中央公論社のバックアップのもと、谷崎の後半生全体にわたって行われた共同プロジェクトであった。『旧訳』から『新訳』へ改訳する過程で行われた常体から敬体へという文体の

変更も含め、様々な人間の関わりを通して谷崎源氏は変容し続けた。山田、玉上ら国文学者たちの書き入れには、戦前から戦中の近代注釈、戦後の現代注釈という、その時代時代の研究成果も反映されており、『源氏物語』の研究史上も注目すべき点がある。(削除)の問題ばかりが注目されてきた『旧訳』は、そもそもどのような注釈書を見て生成されたのか。草稿の書き入れを精査し、現在ほとんど参照されない『源氏物語』の近代注釈からの影響についても検証したい。

谷崎潤一郎は近代文学研究の対象であるが、谷崎源氏は平安文学研究の対象ともなりうる。加えて、出版の規模、検閲を含めた戦前戦後という当時の社会からの影響、あるいは社会への影響など、歴史学、社会学、出版史などからのアプローチも必要である。谷崎源氏研究に関しては、相互補完的な学術交流が求められるのである。学際的な研究において、簡便に基礎データを手取りできる環境づくりは不可欠である。本試案については、近現代文学、古典文学という枠組みを超えて諸氏のご叱正を仰ぎたい。この取り組みを通して、『新訳』草稿が少しでも谷崎源氏研究に寄与することを願う。

(大津直子)

凡例

一、これは、谷崎潤一郎が戦前に刊行した第一回目の源氏物語翻訳となる通称『旧訳』(昭和十四年一月〜十六年七月)を経て、大戦後に刊行した第二回目の翻訳、通称『新訳』(昭和二十六年五月〜二十九年十二月)ができるまでの改訳作業を追ったものである。

一、『旧訳』から『新訳』への改訳過程においては、現在所在が確認できる範囲で六つの手入れ稿が存在している。それぞれ、旧訳本三種と、タイプ原稿三種である。

旧訳本三種とは、『新訳』制作に携わった山田孝雄、玉上琢彌が『旧訳』へそれぞれ書き入れた山田書き入れ旧訳本、玉上書き入れ旧訳本と、二者の旧訳本を参照しつつ谷崎潤一郎が自身の旧訳本に書き入れた谷崎書き入れ旧訳本を指す。タイプ原稿とは、谷崎書き入れ旧訳本を元に起こされた第一稿である。『新訳』序文にも登場している宮地裕氏の証言によれば、タイプ原稿は祇園のタイプライター屋にて五通作られたという(二通は所在不明)。そのうちの三通が再び三者に通ずつ送られ、旧訳本と同様の手順で書き入れが行われた。すなわちタイプ原稿三種とは、山田書き入れタイプ原稿、玉上書き入れタイプ原稿、谷崎書き入れタイプ原稿を指す。

本試案では、『旧訳』から『新訳』へと至る過程を次のように示した。

『旧訳』（太字教科書体）

山田書き入れ旧訳本

玉上書き入れ旧訳本

谷崎書き入れ旧訳本

夕稿 … ここまでの完成形であるタイプ原稿（以下『タイプ』。ゴシック体）

山田書き入れタイプ原稿

玉上書き入れタイプ原稿

谷崎書き入れタイプ原稿

完成形である『新訳』（太字教科書体）

右の九つのテキストに加えて、三者が底本として使用したと考えられる『湖月抄』（吉澤義則・宮田和一郎 全七冊 大正一五年）を冒頭に添えた（湖月）。

一、本試案は、『新訳』における本文の区切りを重視し、一行を四七字とする。また、『旧訳』、『新訳』ともに頭注を設けている。各巻の最初の奇数ページはその一葉で、以下は偶数ページから見開きの奇数ページまで通しで、順にイ、ロ、ハ…と記号を振っているため、本試案でも従った。

一、用字は原則として原資料に拠り、旧仮名遣い・旧漢字とする。なお、崩し字が用いられ新旧の判別が不能の場合は通行の書体に統一

した。

一、『湖月抄』『旧訳』『タイプ』『新訳』を除いた書き入れ原稿については、書き入れがない場合は記載していない。故に『旧訳』から修正が施されていない場合、**湖月**、**旧訳**、**夕稿**、**新訳**のみが並記されている状態となる。

一、頭注は、旧訳本、タイプ原稿ともに書き入れがあった場合にのみ該当箇所次の行に付した。なお、完成形である『新訳』の頭注については、変動の有る無しに関わらず全て起こした。

一、訂正箇所については、煩雑さを避けて、書き入れの意味が同じと見られる場合は出来る限り統一した。例えば、削除の指示については傍線が一本線の場合（——）と、二本線の場合（＝）とが混在しているが、後者に統一した。なお、括弧（ ）で記された場合は括弧のまま統一せずに残した。

一、訂正の書き入れについては常に本文の右側に付した（例①）。いくつかの箇所は、これらを併用し、差し替えや指示表記とした（例②③）。追加箇所についてはスラッシュ記号の後小文字で表記した（例③）。語順の入れ替えについては太字表記とし、旧訳などに見比べることで分かるようにした（例④）。

例① あれも片寄り過ぎてをりますね」と仰せに

例② どのやうになられぬのであろう

例③ さすがに／＼飛字かしくおなりなされて、さうもお取り乱しになぬ本いのであつたが、

例④ そつけなく弾ねつけておいでになるのが、お若い頃の父大臣たちのおん間柄によく似てゐる。

山夕そつけない返事をなさるのでした。父大臣たちのお若い頃のおん間柄によく似てゐる

一、『旧訳』には、訳出されなかった表現・文脈が存在し、『新訳』ではそうした場面について加筆がなされる。今回は、旧訳の当該箇所を と表記した。

一、判読不能だった文字は記号（■）で表記した。字数が確定できない場合は、一律に三字分（）としている。

一、欄外に付されていた書き入れについては、『欄外』小文字とした上で内容または位置において該当する箇所の次行に下地付で付した。改行箇所そのまま手跡を反映している。

一、タイプ原稿については、ふりがなや改行の指示など、編集者による作業の痕跡と思われる書き入れもある。その判別は本試案の任ではないため、そのままとした。

（大脇絵里）

注

- (1) 「正直を云ふと、此の原作の構想の中には、それをそのまま、現代に移植するのは穩當でないとされる部分があるので、私はそこだけだけはきれいに削除してしまった」とある。
- (2) 「旧訳」刊行時期から、岡崎義恵によって本文の削除は厳しく糾弾された（「谷崎源氏論（四）蹂躪された芸術的境地」「東京朝日新聞」昭和一四年五月二六日）。
- (3) 谷崎の、昭和三四年二月稿の山田孝雄追悼文「あの頃のこと」（「谷崎潤一郎全集」第三卷 中央公論社 昭和五八年 三五六頁）など。
- (4) 西野厚志「谷崎源氏・山田孝雄旧蔵『定本源氏物語新解』対照表」（『古代中世文学論考』第一八集 平成一八年一〇月）、「灰を寄せ集める―山田孝雄と谷崎潤一郎訳『源氏物語』―」（講座源氏物語研究第六卷『近代文学における源氏物語』おうふう 平成一九年 一一三頁）など。
- (5) 秋澤 互「谷崎源氏と玉上琢彌―國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』自筆草稿から―」（『國學院雜誌』第一〇九卷一〇号 平成二〇年一〇月）。
- (6) 「新訳」草稿、特に三種の旧訳本には訳文を加筆すべきとされた箇所「略文」あるいは「補」などの書き入れも残っている。したがって、草稿を参照できないためその訳出の実態を探ることが困難と思われた。「旧訳」を研究する上でも参照すべき価値を有している（大津直子「國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿 山田孝雄書き入れ旧訳本文 本文加筆箇所対照表」（『國學院雜誌』第一一〇卷八号 平成二二年八月、大津直子「二つの谷崎源氏——國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿より見る一考察」（『文学・語学』第一九六号 平成二三年三月、大津直子「『源氏物語』を『現代』に移植する——『旧訳』から『新訳』へ谷崎源氏転換のプロセス」（『文学・語学』第二〇四号 平成二四年一月）。
- (7) 大津直子「谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』論——『源氏物語』の翻訳体験との交渉をめぐって」（『日本近代文学』第九三集 平成二七年一月）、ならびに「猫をめぐる物語——『源氏物語』第二部世界と谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』について——」（『物語文学論究』第一四号 平成二八年三月）。
- (8) 大津直子「山田孝雄と『源氏物語』——國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿における注釈態度から」（『国学院大学大学院紀要 文学研究科』第四一号

平成二一年三月)、ならびに「資料編 富山市立図書館山田孝雄文庫蔵自筆原稿翻刻 源氏物語は何を目さしてかいたか」(「野州国文学」第八三号平成二二年三月)を参照されたい。

「蛭」巻試案

湖月 今はかくをもくしき程に、よろづのどかに、おほししづめたる御有様

今はかう云ふ重々しい地位にいらつしやつて、何事にもものんびりと、物靜かに暮らしておいでゞ

玉旧 今はかう云ふ重々しい地位にいらつしやつて、何事にもものんびりと、物靜かに暮らしておいでゞ

〔欄外〕玉鬘三敬語ガ

多スギマス

源氏トノ問ニ差別ガアルヤツデス

谷旧 今は此のやうに重々しい地位にいらつしやつて、何事にもものんびりと、物靜かに暮らしておいでゞ

夕稿 今はこのやうに重々しい地位にいらつしやいまして、何事にもものんびりと、物靜かに暮らしておいでゞ

今は此のやうに重々しい地位にいらつしやいまして、何事にもものんびりと、物靜かに暮らしておいでゞ

注イ、此のやうに重々しい地位にいらつしやいまして

玉旧 一、乙女巻(に源氏卅二才夏) 太政大臣になる

谷旧 一、乙女巻で源氏は卅二歳の夏に太政大臣になつたのである

夕稿 一、乙女巻で源氏は卅二歳の夏に太政大臣になつたのである

一、乙女巻で源氏は卅二歳の夏に太政大臣になつたのである

湖月 ならばたのみ聞こえさせ給へる人々、さまざまにつけて、みな思ふさまにさだまり、たゞよはしからで、あるから、お世話になつていらつしやるおん方々も、それ〴〵御自分達のお氣に召した境涯に落ち着き給ひ、

玉田 あるから、お世話になつていらつしやるおん方々も、それ〴〵御自分達のお氣に召した境涯に落ち着き給ひ、

谷田 ~~あ~~から、お世話になつていらつしやるおん方々も、それ〴〵御自分達のお氣に召した境涯に落ち着き給ひ、夕稿すから、お世話になつていらつしやるおん方々も、それ〴〵御自分達の思ひ通りの境涯に落ち着き、

山夕すから、お世話になつていらつしやるおん方々も、それ〴〵御自分達の思ひ通りの境涯に落ち着き、

〔欄外〕 落ち着きノ意ナルコト勿論ナレド

消極的ノ

イヒ方ニシテ

ソレヲ否定ス

すから、お世話になつていらつしやるおん方々も、それ〴〵御自分達の思ひ通りの境涯に落ち着き、

湖月 あらまほしくてすぐし給、たいの姫君こそいとおしく、思

すつかり御身分がお定まりになつて、お仕合せに過しておいであるのに、たゞ對の姫君ばかりは、お可哀さうにも思

玉田 すつかり御身分が(お)定ま(りにな)つて、お仕合せに過しておいである(のに、)たゞ對の姫君ばかりは、お可哀さうにも思

谷田 すつかり御身分が~~お~~定ま~~り~~になつて、お仕合せに過しておいで~~ある~~の~~に~~、たゞ對の姫君ばかりは、お可哀さうにも思

夕稿 すつかり御身分が定まつて、仕合せに過しておいでになります。たゞ對の姫君は、お可哀さうにも思

山夕 すつかり御身分が定まつて、~~た~~、よはしからで仕合せに過しておいでになります。たゞ對の姫君は、お可哀さうにも思

すつかり御身分が定まつて、仕合せに過しておいでになります。たゞ對の姫君は、お可哀さうにも思

注口、對の姫君

玉田 口、六條院西の對なる玉臺

〔谷田〕口、六條院西の對の姫君、即ち玉鬘

夕稿口、六條院西の對の姫君、即ち玉鬘

口、六條院西の對の姫君、即ち玉鬘

湖月 彼のほかなるおもひそひて、いかにせんとおほしみだるめかれ、かの

ひの外な心配事が出来なされて、どうしてよいやらと案じ煩うていらつしやるらしい。あのいつ

〔玉田〕 彼の外な心配事が（お）出来（なされ）て、どうしてよいやらと案じ煩うていらつしやるらしい。あのいつ

〔谷田〕 彼の外な心配事が出来なされて、どうしてよいやらと案じ煩うていらつしやるらしいのです。あのいつ

夕稿 彼の外な心配事が出来まして、どうしてよいやらと案じ煩うていらつしやるらしいのです。あのいつ

ひの外な心配事が出来まして、どうしてよいやらと案じ煩うていらつしやるらしいのです。あのいつ

湖月 げんが、うかりしさまには、なずらふべきけはひならねど、かゝるすぢに、かけても人のおもひより

ぞやの大夫の監の厭らしきとは一緒にすべくもないけれども、そんな風なお心がおありになる

〔谷田〕 ぞやの大夫の監の厭らしきとは一緒にすべくも本^{ありませぬ}いけれども、そんな風なお心がおありになる

夕稿 ぞやの大夫の監の厭らしきとは一緒にすべくもありませぬけれども、そんな風なお心がおありになる

ぞやの大夫の監の厭らしきとは一緒にすべくもありませぬけれども、そんな風なお心がおありになる

湖月 きこゆべきことならねば、心ひとつにおほしつゝ、さまことうと

とは誰にも夢にも存じ上げないことであるから、ひとりお胸をお痛めになりながら、また格別な疎^{うと}

〔玉田〕 とは誰にも夢にも存じ上げないことであるから、ひとりお胸をお痛めになりながら、また格別な疎^{一種特別な疎}

〔谷田〕 とは誰にも夢にも存じ上げないことであるから、ひとりお胸をお痛めになりながら、また格別な疎^{うと}

夕稿とは誰にも夢にも存じ上げないことですから、ひとり胸をお痛めになりながら、また特別な疎うと

山夕とは誰にも夢にも存じ上げないことですから、ひとり胸をお痛めになりながら、また特別な疎うと

【欄外】心ひとつに（ヤ、意チガフ）（サリトテ池田氏ノ

「二途に」トイフハ當ラス

寧ろ「ひとり」ノ方

マサル、「人ニ

イハレヌコト」ナル故

「心一ツ」トイフ

ナルベシ）

【欄外】若紫ニ「中将の君もおとろくしうさまことなる夢をみ給て」

コノ訳 ■ニ「異様な夢」ト訳セリ、ソレニ准スベキカ

谷夕とは誰にも夢にも存じ上げないことですから、ひとり／＼ひそかに胸をお痛めになりながら、また特別な疎うと

とは誰も夢にも存じ上げないことですから、ひとりひそかに胸をお痛めになりながら、一種異様な疎うと

湖月ましと思ひきこえ給、なにことをも覺ししりたる御よはひなれば、とごま

ましさを感じていらつしやるのであつたが、いろ／＼なことがお分りになるお年頃のことなので、あれ

玉田ましさを感じていらつしやる（のであつたが）、いろ／＼なことがお分りになるお年頃のことなので、あれ

谷田ましさを感じていらつしやるのであつたが、いろ／＼なことがお分りになるお年頃のことなので、あれ

夕稿ましさを感じていらつしやるのでした。いろ／＼なことが分つて來られたお年頃のことなので、あれ

山夕ましさを感じていらつしやるのでした。いろ／＼なことが分つて來られたお年頃のことなので、あれ

ましさを感じていらつしやるのでした。いろ／＼なことが分つて來られたお年頃のことなので、あれ

湖月かうざまに覺しあつめつ、母君のおはせずなりにける口おしさも、またとりかへし

やこれやお考へ集めになつては、母君がいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

玉田 やこれやお考へ集めになつては、母君がいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

谷田 やこれやお考へ集めになつては、母君がお亡くなりなされたくちをいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

夕稿 やこれやお考へ集めになつては、母君がお亡くなりなされたくちをいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

山夕 やこれやお考へ集めになつては、母君がお亡くなりなされたくちをいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

谷夕 やこれやお考へ集めになつては、母君がお亡くなりなされたくちをいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

やこれやお考へ集めになつては、母君がお亡くなりなされたくちをいらつしやらない口惜しさなども、今更のやうに

〔欄外〕今サシ道長ヲ思フ心テアリタシ

湖月 おしくかなしくおほゆ、おとゞもうちいでそめ給ては中々くるしくおほ

悔しく悲しくお思ひになる。大臣も今は却つて、お惱み遊ばしていらつしやつたが、

山田 悔しく悲しくお思ひになる。大臣も今は却つて、お惱み遊ばしていらつしやつたが、

玉田 悔しく悲しくお思ひになる。大臣も今は却つて、お惱み遊ばしていらつしやつたが、

谷田 悔しく悲しくお思ひになる。大臣も、お口に出してお打ち明けになりましてからは、は却つて、お惱み遊ばしていらつしやつたが、人目を憚り給つて、ちよつ

夕稿 悔しく悲しく思ふのです。大臣も、お口に出してお打ち明けにまりましてからは、却つて悩んでいら

悔しく悲しく思ふのです。大臣も、お口に出してお打ち明けになりましたからは、却つて悩んでいら

湖月 せど、人めをはかり給つ、はかなきことをもえ聞え給はず、くるしくもおほさる、

何

玉田 何 人目を憚り給つて一寸したことも仰せになれず、苦しうまでにお感じなので、

夕稿 つしやいましたが、人目を憚り給つて、ちよつとしたこともよう仰せにならず、苦しきの餘りには何

つしやいました、人目を憚り給うて、ちよつとしたこともよう仰せにならず、苦しきの餘りには何

湖月まゝに、しげくわたり給つ、おもへの人どをくのどやかなるおりは、たゞならずけしきはみ聞え給うことに、

かと足繁くお渡りになつては、お前がひつそりと人氣のない折などに、それと灰ほのめかされることがある

山田かと足繁くお渡りになつては、お前がひつそりと人氣のない折などに、 それと灰ほのめかされることがある

玉田足繁くお渡りになつては、お前がひつそりと人氣のない折などに、それとほのめ／我慢わごまんできず、灰ほのめかされることがある

谷田かと足繁くお渡りになつては、お前がひつそりと人氣のない折などに、それと灰ほのめか／し給ふことがありますので、

夕稿かと足繁くお渡りになりまして、お前がひつそりと人氣のない折に、それと灰ほのめかし給ふことがありま

かと足繁くお渡りになりまして、お前がひつそりと人氣のない折に、それと灰ほのめかし給ふことがありま

湖月むねつぶれつ、けぎやかにはしたなくきこゆべきにはあらねば、

のに、そのつどはつと遊あそばしながら、さうきつぱりと、間の悪い目にお遇はせになる譯にも行かず、

玉田のに、そのつどはつと遊あそばしながら、(さう)きつぱりと、間の悪い目にお遇はせになる譯にも行かず、

谷田そのつどはつと遊あそばながら、さうきつぱりと、間の悪い目にお遇はせ申す譯にも行かず、

夕稿すので、そのつどはつきりとなさりながら、さうきつぱりと、間の悪い目にお遇はせ申す譯にも行かず、

すので、そのつどはつとなさりながら、さうきつぱりと、間の悪い目にお遇はせ申す譯にも行かず、

湖月たゞみしらぬさまにもてなしきこえ給ふ、人さまのわら、かに、けぢかくものし

たゞそのやうなことは分らぬ風にあしらうておいでになるのである。でも御性質が晴れやかで、人なつこくて

谷田たゞそのやうなことは分らぬ風にあしらうておいでになるのである。でも御性質が晴れやかで、人なつこくて

夕稿たゞそのやうなことは分らぬ風にあしらうておいでになります。御性質が晴れやかで、人なつこくて

たゞそのやうなことは分らぬ風にあしらつておいでになります。御性質が晴れやかで、人なつこくて

湖月 給へば、いたくまめだちたる心ちし給へど、なをおかしくあいぎやう

おいでゝあるから、せいぐ取り澄ましたおつもりでいらつしやつても、矢張にこやかに、愛嬌のおあ

玉田 おいでゝあるから、せいぐ取り澄ましたおつもりでいらつしやつても、矢張にこやかに、愛嬌のおあ

谷田 おいでゝあから、せいぐ取り澄ましたおつもりでいらつしやつても、矢張にこやかに、愛嬌のおあ

夕稿 おいでゝあから、せいぐ取り澄ましたおつもりでいらつしやつても、矢張にこやかに、愛嬌のおあ

おいでゝすから、せいぐ取り澄ましたおつもりでいらつしやつても、矢張にこやかに、愛嬌のおあ

湖月 つきたるけはひのみ見えたまへば、兵部卿の宮などは、まめやかにせめきこえ給、御らうの程は

りになるところが見え給ふので、兵部卿宮などは切々おたよりをお上げになつて、まだそれほどの辛苦を

山田 になりになるところが見え給ふので、兵部卿宮などは切々おたよりをお上げになつて、まだそれほどの辛苦を

谷田 になりになるところが見え給ふので、兵部卿宮などは切々おたよりをお上げになつて、まだそれほどの辛苦を

夕稿 になりになるところが見え給ふので、兵部卿宮などは切々おたよりをお上げになつて、まだそれほどの辛苦を

谷田 になりになるところが見え給ふので、兵部卿宮などは切々おたよりをお上げになつて、まだそれほどの辛苦を

るところがお見えになりますので、兵部卿宮などは切々おたよりをお上げになります。まだ志をお見

湖月 いくばくならぬに、「五月雨になりぬるうれへをし給て、

重ねられた譯でもないのに、もう五月雨になつたことをお訴へなさ

山田 重ねられた譯でもないのに、もう五月雨になつたことをお訴へなさ

〔欄外〕「をかしく」

〔谷田〕た譯でもありませぬのに、もうイ五月雨になつたことをお訴へなさ

〔夕稿〕御心勞をなさつた譯でもありませぬのに、もう五月雨になつたことをお訴へなさ

〔山夕〕御心勞をなさつた譯でもありませぬのに、もう五月雨になつたことをお訴へなさ

〔欄外〕志ヲ見セテモ多クノ日數ヲ經ヌナリ

〔欄外〕「年功」トイフニ近シ

〔欄外〕「らう」ハ功勞をつむの意ニシテ

苦勞ノ意ト誤ナリコノ意ノ説ハ

誤ニ近シ

又日數ノ意ニ近シ

〔谷夕〕御心勞をなさつた譯でもありませぬのに、もうイ五月雨になつたことをお訴へなさ

せになつてからそれほどの日數を經た譯でもありませぬのに、もう五月雨になつたことをお訴へなさ

注イ、五月雨

〔夕稿〕イ、五月は縁を結ぶことを忌んだ月であると云ふ

イ、五月は縁を結ぶことを忌んだ月であると云ふ

〔湖月〕すこしけちかき程をだにゆるし給はさ、思ふことをも、かたはしはるけ

れて、「今少しお側近いあたりへ伺ふ譯には行かないでせうか。せめて心にあることの片端なりとも聞え上げて、氣を晴

〔谷田〕れて、「今少しお側近いあたへ伺ふ譯には行かないでせうか。せめて心にあることの片端なりとも聞え上げて、氣を晴

〔夕稿〕れて、「今少し近くへ伺はせて戴けましたら、心にあることの片端なりとも聞え上げて、氣を晴

〔山夕〕れて、「今少し近くへ伺はせて戴けましたら、心にあることの片端なりとも聞え上げて、氣を晴

れて、「今少しお側近くへ伺はせて戴けましたら、心にあることの片端なりとも聞え上げて、氣を晴

〔湖月〕てしがなど、きこえ給へるを、殿御らんじて、なにかは

らしたいものですが」とおした、めになるのであつたが、大臣は御覽遊ばして、「まあ、

谷田ら「たいすいす」のすが「とおした、めになるのであしたが、大臣は御覽／＼に違なりまして、「まあく、夕稿らすのすが」とおした、めになるのすが、大臣は御覽なりまして、「まあく、

山夕らすのすが」とおした、めになるのすが、大臣は御覽なりまして、「まあく、

玉夕らすのすが」とおした、めになるのすが、大臣は御覽なりまして、「まあく、

谷夕らすのすが」とおした、めになるのすが、大臣は御覽なりまして、「何の構まみものすか。まあく、

らすのすが」とおした、めになるのすが、大臣は御覽なりまして、「何の、構まみものすか。

湖月此君達のすき給はんは、み所ありなんかし、もてはなれてなきこえ給そとをし
かう云ふお方たちのお戯あそれはさぞ見所みどころがあることでせう。あまりそつげなくさいますな」とお諭さと

玉田かう云ふお方たちのお戯あそれはさぞ見所みどころがあることでせう。あまりそつげなくさいますな」とお諭さと

谷田かう云ふお方たちの御懇望ごこんぼうならさぞ甲斐あひがあることでせう。あまりそつげなくさいますな」とお諭さと

夕稿かう云ふお方たちの御懇望ごこんぼうならさぞ甲斐あひのあることでせう。あまりそつげなくさいますな」とお諭さと

玉夕かう云ふお方たちの御懇望ごこんぼうならさぞ甲斐あひのあることでせう。あまりそつげなくさいますな」とお諭さと

【欄外】「すき給はんは」

【欄外】旧訳

「お戯れ」
コノ中間ニ
願ヒタシ

かう云ふお方たちの御懇望ならさぞ甲斐のあることでせう。あまりそつげなくさいますな」とお諭さと

湖月へて、御かへり時々聞え給へとて、御かへりをしへてか、せ奉り給へど、

しになり、「時々、御返事をお上げなさい」と、おん文の文句を教へてお上げになつて、お書きになるやうにお勧めになる。しかし姫君

玉田しになり、「時々、御返事をお上げなさい」と、おん文の文句を教へて（お上げになつて）、お書きになるやうにお勧めになる。（しかし）姫君

谷田しになり、「時々、御返事をお上げなさい」と、おん文の文句を教へて、お上げになつて、お書きになるやうにお勧めになる。しかし姫君

夕稿しになり、「時々、御返事をお上げなさい」と、文句を教へて、お書かせになるのですけれども、姫君

谷夕しになり、／＼「時々、御返事をお上げなさい」と、文句を教へて、お書かせになるのですけれども、姫君

しになり、「時々、御返事をお上げなさい」と、文句を教へて、お書かせになるのですけれども、姫君

湖月いとうたて覺え給へば、みだり心ちあしとて聞え給はず、人々もことに

はお厭なので、氣分が悪いと仰せになつて、書かうとも遊ばされないし、女房達の中にも、

玉田はお厭なので、氣分が悪いと（仰せになつて、）書かうとも遊ばされないし、女房達（の中に）も、

谷田はお厭なので、氣分が悪いと仰せになつて、書かうとも遊ばされないし、女房達の中にも、／＼取り分けて身分のよい。

夕稿はお厭なので、氣分が悪いと仰せになつて、書かうともなさいませぬ。女房達の中にも、取り

山夕は／＼とお厭なので、氣分が悪いと仰せになつて、書かうともなさいませぬ。女房達の中にも、取り

谷夕は／＼とお厭なので、氣分が悪いと仰せになつて、書かうともなさいませぬ。女房達の中にも、取り

はひどくお厭なので、氣分が悪いと仰せになつて、書かうともなさいませぬ。女房達の中にも、取り

湖月やむごとなく、よせをもきなども、おさく／＼なし、たゞは、君の御おぢなりける、宰相ばか

御代筆が勤まるやうな身分柄の者などは殆どゐない。たゞ母君のおん伯父で、宰相1ぐら

玉田御代筆が勤まるやうな身分柄の者などは殆どゐない。たゞ母君のおん伯父で、宰相1ぐら

谷田 御代筆が勤まるやうな身分柄の者などは殆どませぬ。たゞ母君のおん叔父で、宰相ぐら。
夕稿 分けて身分のよい、御代筆が勤まるやうな者などは殆どませぬ。たゞ母君のおん叔父で、宰相ぐら。

山夕 分けて身分のよい、御代筆が勤まるやうな者などは殆どあんなまり。たゞ母君のおん叔父で、宰相ぐら。

【欄外】

伯父カ
叔父カ

明カナラス

諸注

伯父トセリ

夕顔ノ父

三位申將

参議ハ

官トシテハ

中將ヨリ

重ケレド

四位モ有

コトアレバ

叔父ノ方

或ハヨカラン

但シ強ク主張シウル

理由ナシ

【欄外】

古人ヲサスニ

ソノ極官ヲ次デ

称フル故ニ「なつた

ことのある」ハイハズ

シテヨキ筈

ナリ

谷夕 分けて身分のよい、御代筆が勤まるやうな者などは殆ど餘り。たゞ母君のおん叔父で、宰相ぐら。

分けて身分のよい、御代筆が勤まるやうな者など、餘りませぬ。たゞ母君のおん叔父で、宰相ロぐら

注口、宰相

夕稿イ、参議の唐名からな

口、参議の唐名からな

湖月リの人のむすめにて、心ばせなど口おしからぬが、世におとろへ残りたるを、尋とり給へ

ゐになつたことのある人の娘で、才能なども一通りは備はつてゐるのが、親おぐに後れて落ちぶれてゐたのをお取り

谷田ニゐになつたことのある人の娘で、才能なども一通りは備はつてゐるますのが、親おぐに後れて落ちぶれてゐましたのをお取り

夕稿ニゐになつたことのある人の娘で、才能などの一通りは備はつてゐるますのが、親おぐに後れて落ちぶれてゐましたのをお取り

山夕ニゐになつたことのある人の娘で、才能などの一通りは備はつてゐるますのが、親おぐに後れて落ちぶれてゐましたのをお取り

谷夕ニゐになつたことのある人の娘で、才能などの一通りは備はつてゐるますのが、親おぐに後れて落ちぶれてゐましたのをお取り

ゐの人の娘で、才能なども一通りは備はつてゐるますのが、親おぐに後れて落ちぶれてゐましたのをお取り

湖月ルゐるぞ、宰相の君とて、手などもよろしくかき、おほかたも

立てになつて、宰相の君と云ふ名で呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい

玉田リ立てになつて、宰相の君と云ふ名で呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい大

谷田リ立てになつて、宰相の君と云ふ名で呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい

夕稿リ立てになつて、宰相の君と云ふ名で呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい

山夕リ立てになつて、宰相の君と云ふ名で呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい

谷夕リ立てになつて、宰相の君と云ふ名で呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい

立てになつて、宰相の君と呼んでいらつしやつたが、それが手なども相應に書き、いつたい

湖月 おとなひたる人なれば、さるべきおりく御返りなどか、せたまへば、

に世馴れてゐるところから、然るべき折々のおん返りごとなどをお云ひつけになることがあるので、

玉田 に世馴れてゐるところから、然るべき折々のおん返りごとなどをお云ひつけになることがあるので、

旧訳 に世馴れてゐるところから、然るべき折々のおん返りごとなどをお云ひつけになることがあ^{ります}ので、

夕稿 に世馴れてゐますところから、然るべき折々のおん返りごとなどをお云ひつけになることがあ^{ります}ので、

山夕 に世馴れてゐますところから、然るべき折々のおん返り／＼ごと／＼などをお云ひつけになることがあ^{ります}ので、

谷夕 に世馴れてゐますところから、然るべき折々のおん返りごとなどをお云ひつけになることがあ^{ります}ので、

に世馴れてゐますところから、然るべき折々の御返事などをお云ひつけになることがあ^{ります}ので、

湖月 めし出でこと葉などの給てか、せ給ふ、

その者をお召し出しになり、言葉などを授けてお書かせになる。

玉田 その者をお召し出しになり、言葉などを授けてお書かせになる。

谷田 その者をお召し出しになり、言葉などを授けてお書かせにな^{ります}。

夕稿 その者をお召し出しになりまして、言葉などを授けてお書かせになります。

その者をお召し出しになりまして、言葉などを授けてお書かせになります。

湖月 物などのたまふさまを、ゆかしとおほすなるべし、さうじみは、

殿にしてみれば、宮が物など仰せられる御様子を御覽になりたいのであらうが、姫君もまた、

玉田 殿にしてみれば、宮が物など仰せられる(御)様子を御覽になりたいのであらう(が)、姫君もまた、

谷田 殿にしてみれば、宮が物など／＼を仰せられる御様子を御覽になりたいのであ^{らう}／＼が、姫君もまた、

夕稿 殿にしてみれば、宮が物などを仰せられる様子を御覽になりたいのでせう。姫君もまた、

山夕殿にしてみれば、宮が物などを仰せられる様子を御覽になりたいのでせう。姫君もまた、

【欄外】 本人トイフコトバライカシ

タシ

正身まご

玉夕殿にしてみれば、宮が物などを仰せられる様子を御覽になりたいのでせう。姫君もまた、

【欄外】 單ニ言ふ意デナク

女ニ言ひ寄るノ意味ヲ出シテ

イタゞキタク思ヒマス

谷夕殿にしてみれば、宮が物どんな風に云ひ寄らなどを仰せられる／＼か、様子を御覽になりたいのでせう。／＼當の姫君もまた、

殿にしてみれば、宮がどんな風に云ひ寄られるか、様子を御覽になりたいのでせう。當たうの姫君もまた、

湖月かくうたである物なげかしの後は、この宮などは哀げにきこえ給時は、すこし

あの淺ましい思ひを遊ばしてからは、此の宮などが殊勝らしいことを仰せられると、少しは

谷田あの淺ましい思ひを遊なごつばしてからは、此の宮などが殊勝哀れげに云つてお寄越しになりますらしいことを仰せられると、少しは

夕稿あの淺ましい思ひをなさつてからは、此の宮などが哀れげに云つてお寄越しになりますと、少しは

あの淺ましい思ひをなさつてからは、此の宮などが哀れげに云つてお寄越しになりますと、少しは

湖月みいれ給ふ時もありけり、なにかとおもふにはあらず、かく心うき

心を惹かれ給ふ折もないではなかつた。それと云ふのも、何かと慕うていらつしやるのではなくて、歎か

玉田心を惹かれ給ふ折もないではなかつた。それと云ふのも、何かと慕うていらつしやるのではなくて、歎か

谷田心を惹かれ給ふ折もないではなかつた。それと云ふのも、何かと慕戀ひ慕つていうていらつしやるのではなくて、歎か

夕稿眼をとめてお読みになる折もありました。それと云ふのも、何かと戀戀ひ慕つていひ慕つてゐるのではなくて、歎か

山夕眼をとめてお読みになる折もありました。それと云ふのも、何／＼のか／＼と戀戀ひ慕つていひ慕つてゐるのではなくて、／＼か／＼歎か

玉夕 眼をとめてお読みになる折もありました。それと云ふのも、何かと戀ひ慕つてゐるのではなくて、歎か

【欄外】強スギマス

谷夕 眼をとめてお読みになる折もありました。それと云ふのも、どうの戀ひ慕つてゐるのではなくて、歎か
眼をとめてお読みになる折もありました。それと云ふのも、どうのかうのと思ふのではなくて、歎か

湖月 御氣色みぬわざもがなと、さすがにされたる所つきておぼし

はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなとお思ひになつたところから、さすがに宮を洒落れたお方よとお感じ遊ばすやうになつたのであるが、

玉田 はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなとお思ひになつたところから、さすがに宮を洒落れたお方よとお感じ遊ばすやうになつたのではあるが、

【欄外】さすがに玉鬘モ出来テされた
る所つきて
思しけり

谷田 はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなとお思ひになつたところから、さすがに雷を洒落れた
お方よとお感じ遊ばすやうになつたのではあるが。

夕稿 はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなと思ふところから、さすがに洒落れた考におなり

玉夕 はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなと思ふところから、さすがに洒落れた考におなり

【欄外】避ける

逃げる

色氣ツク

情ヲ解ス

谷夕 はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなと思ふところから、さすがに洒落れた考におなり

はしい大臣のなされ方を、見ぬやうにする術もがなと願ふところから、さすがに洒落れた考におなり

湖月 けり、殿はあいなくをのれこゝろげさうして、宮を待聞え給も、しり給は

宮は都合のよい御返事をお貰ひになつたので、大臣が妙に御自分一人力瘤を入れて待ち構へていらつしやるのも御存知な

玉田 宮は大臣が妙に御自分一人力瘤を入れて待ち構へていらつしやるのも御存知な

谷田 宮は都命のよい御返事をお貰ひになつたので、大臣が妙に御自分一人力瘤を入れて待ち構へていらつしやるのも御存知な

夕稿 なされたのでした。宮は、大臣が妙に御自分一人力瘤を入れて待ち構へていらつしやるのも御存知な

山夕 なされたのでした。宮は、大臣が妙に御自分一人力瘤を入れて待ち構へていらつしやるのも御存知な

〔欄外〕コ、ハ、ヤハリ原文ノ通りニ殿ヲ主トシテ前ニスベキニ似タリ

なされたのでした。宮は、大臣が妙に御自分一人力瘤を入れて待ち構へていらつしやるのも御存知な

湖月 で、よろしき御かへりなるを、めづらしがりて、いとしのびやかにておはしましたり、つまどのまに

く、珍しいことだと思ひなされて、たいそう忍びやかにお渡りになつた。と、先づ妻戸の間に

玉田 く、都合のよい御返事をお貰ひになつたので、珍しいことだと思ひなされて、たいそう忍びやかにお渡りになつた。と、先づ妻戸の間に

谷田 く、色よい御返事があつた嬉しさに、珍しいことだと思ひなされて、たいそう忍びやかにお渡りになつた。と、先づ妻戸の間に

夕稿 く、色よい御返事があつた嬉しさに、たいそう忍びやかにお渡りになりました。と、妻戸の間に

山夕 く、色よい御返事があつた嬉しさに、たいそう忍びやかにしてお渡りになりました。と、妻戸の間に

谷夕 く、色よい御返事があつた嬉しさに、たいそう忍びやかにしてお渡りになりました。と、妻戸の間に

く、色よい御返事があつた嬉しさに、たいそう忍びやかにしてお渡りになりました。と、妻戸の間に

湖月 御しとね參らせて、み木丁ばかりを隔にて、ちかき程なり、

おん 茵を設けて、御几帳だけを中に隔て、、つい姫君のお側に近くお請じ入れになるのであつたが、

谷田 おん 茵を設けて、御几帳だけを中に隔て、、つい姫君のお側に近くお請じ入れにならなものであつたが、

夕稿 おん 茵を設けて、御几帳だけを中に隔て、、つい姫君のお側に近くお請じ入れ入れます。

山夕 おん 茵しよぬを設けて／請じ入れますか？、御几帳だけを中に隔て、、つい姫君のお側に近くしやうき所です？請じ入れます。

【欄外】まゐらせてニテ宮ノ
坐レル
コトヲ示セリ

谷夕 おん 茵しよぬを設けて／請じ入れるのですが、御几帳だけを中に隔て、、つい姫君のお側に近くしやうき請じ入れますなので。

おん 茵しよぬを設けて 請じ入れるのですが、御几帳だけを中に隔て、、つい姫君のお側に近くしやうき請じ入れます。

※なお、紙幅の都合上、本試案は「螢」巻全体の一部にあたる。今後何らかの形で全文を公開する予定である。

※本試案は、平成二六年度採択、科学研究費若手研究(B) (研究課題26770087「『旧訳』を中心とした谷崎源氏テキストに関する基礎的研究―翻訳文学としての再検討―」)の成果である。

